

第一章

奈良時代の学者も知っていた女王へ卑彌呼

やまとは 国のまほろば たたなづく
青垣アオカキ 山ウルフごもれる やまとし麗ハし

〔倭建命／日本武尊（古事記）〕

「大和はわが国のなかでもっとも優れた土地だ。青い垣根のように重なった山々に囲まれた大和はなんと美しいことか。」

（出典は古事記だが、日本書紀では似た歌が日本武尊の父景行天皇の御製とされている。古くから謡われてきた大和賛歌なのだろう）

八雲立ヤクモつ

出雲八重垣イズモヤエガキ 妻籠ツマゴみに

八重垣ヤエガキつくる その八重垣ヤエガキを

〔須佐之男命／素戔鳴尊（古事記）〕

「八雲立つ出雲の地に雲のように幾重にも垣をめぐらし、妻のいるところとして幾重にも垣をつくっている。ああ、この幾重にもめぐらした垣よ。」

（高天原を追われた尊が出雲国に宮をつくったときの歌で、日本で最初の五七五七七形式の短歌ともいわれる）

一・一

『魏志倭人伝』の二つの謎

天才的軍師として有名な諸葛孔明が活躍した魏・蜀・呉の三国時代の歴史を記したシナの『三国志』のなかに、『魏志倭人伝』と通称されるみじかな文章がある。魏というのは、三国時代に覇をとなえた魏の国のことで、倭人というのは、昔のシナ王朝が日本人を呼ぶときに使った言葉である。

つまり『魏志倭人伝』とは、史書『三国志』のなかの魏の国の歴史を記した部分にある、日本人についての記事——ということになる。

それによると、三世紀前半の日本に《邪馬台国》と呼ばれる国があり、そこに《卑彌呼》なる女王がいて、三国のうちで日本にいちばん近い魏の国と外交関係をむすんでいたのだという。

諸葛孔明らの活躍を面白く描いた『三国志演義』は十四世紀に完成した大衆文学だが、『三国志』はずっと古く三世紀末に完成した正式の史書である。したがってそこにある『魏志倭人伝』は、日本について記述した公的で最古の外国文献であり、かつ日本国内には同時代に書かれた文献が発見されていないため、古くから歴史家たちに興味をもたれてきた。

◎二つの疑問と多様な意見

ただ、『魏志倭人伝』は記述があまりにも断片的でそれだけでは詳細がわからないため、

「《邪馬台国》とはいったいどこにあったのか？」

「女王《卑彌呼》とはいったい何者なのか？」

——といった疑問が生じた。

この疑問の起源はとても古く、現存するわが国最古の史書『古事記』『日本書紀』（あわせて『記紀』という）

の時代からあったらしいのだが、江戸中期から学者の興味をひくようになり、江戸中期→明治→大正→昭和（戦前）→昭和（戦後）→平成と、時代が下がるにしたがつて議論は盛んになった。

とくに戦後の昭和後半からは、専門の歴史家や考古学者だけでなく、アマチュアの歴史ファンたち——そのなかには在野の歴史家といわれる人もいれば単なる空想好きなマニアもいる——が議論に参入したため、おびただしい量の意見が発表されるようになった。

さらには、〈卑彌呼〉を主人公にした小説も数多く出版されるようになった。とくに自費出版のなかにそれがひじょうに多く、じつに多様な見解が出されている。

《邪馬台国》や〈卑彌呼〉の読みにも、異説がたくさんある。

本書ではとりあえず「ヤマトコク」「ヒメコ」と読んでおくが、「ヤマトコク」「ヒメコ」という説もある。

著者が昔読んでいた昭和二十年代の高校教科書では、〈卑彌呼〉の右と左に、「ヒミコ」と「ヒメコ」二種類のフリガナがうってあった。

また《邪馬台国》を「ヤマトコク」と読む意見も、多くの著名な学者が主張している。

古代の発音はこれら二つの見解の中間だったかもしれないし、どちらともいえないものだったかもしれない。だから本書のフリガナはあくまでも仮のものである。

《邪馬台国》の場所についても、意見は多様である。

図1・1に、これまで多くの学者やアマチュアが主張してきた《邪馬台国》の位置を図示してみた。

まことに百花繚乱である。

なかには日本列島をはみ出してフィリピンやインドネシアや中東説をまじめに主張する人もいるし、さらには『魏志倭人伝』のなかにある他の国を南米に求める意見まである。

◎議論の収束と本書執筆の理由

このように《邪馬台国》問題は収拾がつかないほど拡がりが大きく、呆然としてしまうほどなのだが、しかし平成にはいつてから、山のようにあったこれらの議論がしだいに収束の傾向をみせはじめた。

三世紀前後の時代の考古学的な研究がおどろくほどの



図 1 ・ 1 無数にある《邪馬台国》候補地

進展をみせ、新発見があいつぎ、従来の定説がつぎつぎにくつがえされたからである。

著者は古代史・考古学ともに素人であるが、その素人がこのような本を書こうと思ったのは、考古学の進展によつて議論が収束しつつあることを知り、さいきんの良心的な学者たちの研究成果を自分なりに勉強してまゝとめてみたいと考えたからである。

さらにもうひとつ理由がある。

それは、戦後の議論や教育のなかで、現存するわが国最古の史書である『古事記』や『日本書紀』が軽視されすぎていくことへの不満である。

『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』といった古い書物は、とうじの日本人のあいだに伝えられていた記憶が結晶したものであり、編者による脚色があつたとしても、そこには古代の貴重な情報が秘められているにちがいない。

だからこれらを軽視するのは科学的態度とは思えないのだ。

そこで本書では、『記紀』を最大限に活用することにし、同時に若い人たちのための『記紀』の解説にも意を用いることにした。

◎大和の定義

さてつぎに、先の設問のうちの、

「《邪馬台国》とはいったいどこにあつたのか？」

——について、どのような学者がどのような説を述べてきたかをまとめてみることにしよう。

《卑彌呼》のほうは、《邪馬台国》が決まればおのずと範圍がせめられるから、あとまわしでよい。

よく知られているように、《邪馬台国》の位置について
の见解は、「九州説」と「畿内説」に大きく分けられる。
このうち「九州説」は北九州から南九州までばらつきがあるが、「畿内説」のほとんどは奈良県内の「大和説」である。

畿内とは古代に都がおかれた大和・河内・和泉・摂津・山城（現在の奈良県・大阪府および京都府の一部）であるが、大和地方以外に求める意見はすくないので、本書では以後「畿内説」とはいわず、「大和説」と記すことにする。

ただし大和^{ヤマト}とは以下に記すように大から小までいくつかの定義があるので、本書での定義を明確にしておかねばならない。

- 一 大和魂、大和撫子^{ナデシコ}など日本全体を指す場合。
- 二 八世紀ごろからの行政区分としての大和国^{ヤマトノクニ}、つまり現在のほぼ奈良県全体。
- 三 古くからヤマトと呼ばれてきた地域で、奈良県の北西部にひろがる奈良盆地一帯。
- 四 古代からヤマトと呼ばれてきたとされる地域で、北方の奈良市などを除いた奈良盆地の南東部（いまの桜井市とその周辺の天理市・田原本町・橿原市・明日香村など）。
- 五 ヤマトという言葉の発祥の地ともされる限定された地域で、桜井市のなかで神の山とされる《三輪山^{ミワヤマ}》の北西山麓にある纏向遺跡^{マキムク}とそのすぐ北（朝和・柳本地区）および南（磐余地区^{イワレ}）からなる地域。

多くの「大和説」の学者が推理している《邪馬台国》は、このなかの四または五に含まれる。

したがって本書では、大和を主として四や五の意味でつかうことにする。

ただし他の意味で使うこともあるので、紛らわしくなる場合には《》で囲った《大和》という表記で四や五の大和をあらわすことにする。

《邪馬台国》九州説と大和説

◎「九州説」の学者、「大和説」の学者

《邪馬台国》^{ヤマトイコク}の位置については、図1・1のように「九州説」と「大和説」のほかにも多くの説があり、とくにアマチュアの説に奇想天外なものがあつて、日本列島以外に求める人もいるわけだが、学問的レベルの高い専門の歴史家や考古学者で九州と大和の二箇所以外を主張する人はすくない。

そこでここでは、この二つの説を述べた著名な学者の名前を並べてみよう。

名前の下の（ ）内に主な経歴を記した。

数字は生年である。

「《邪馬台国》九州説」

*

新井白石

（一六五七／江戸前中期の儒学者・大和説から九州説に変化）

本居宣長

（一七三〇／江戸中期の著名な国学者・古事記伝で有名）

菅 政友

（一八二四／明治の史家・石上神宮大宮司）

久米邦武

（一八三九／文博・岩倉使節団員として米欧回覧実記を執筆・史家・東大教授）

星野 恒

（一八三九／文博・史学漢学・東大教授・史学会会長）

那珂通世

（一八五一／文博・東洋史学・一高教授）

白鳥庫吉

（一八六五／文博・東洋史学・東大教授・東洋文庫主宰）

津田左右吉

（一八七三／文博・白鳥の弟子・古代史学・早大教授・文化勲章受章）

橋本増吉

（一八八〇／文博・史学・慶應大教授・東洋大学長）

太田 亮

（一八八四／法博・立命館大学教授・神道学者・神宮皇學館出身）

坂本太郎
サカモト タロウ

(一九〇一／文博・東大教授・歴史学・史料編纂所長・文化勲章受章)

榎一雄
エノキ カズオ

(一九一三／文博・東大教授・史学・東洋文庫理事長)

斉藤國治
サイトウ クニジ

(一九一三／理博・東京天文台教授・古代の日蝕研究など古天文学を開拓)

井上光貞
イノウエ ミツサダ

(一九一六／文博・東大教授・歴史学・国立歴史民族博物館初代館長)

谷川健一
タニガワ ケンイチ

(一九二一／日本地名研究所長・史家)

田中卓
タナカ タカシ

(一九二三／文博・歴史学・皇學館大學学長)

古田武彦
フルタ タケヒコ

(一九二六／昭和薬科大学教授・邪馬台国研究家)

森浩一
モリ コウイチ

(一九二八／考古学・同志社大学教授)

安本美典
ヤスモト ビーデン

(一九三四／文博・日本語語源や邪馬台国研究・産能大学教授)

・ ・ ・ ・ ・

「邪馬台国」大和説

舍人親王
トネリ シンノウ

(六七六／『日本書紀』編者)

伴信友
バン ノブトモ

(二七七二／宣長の死後の弟子)

三宅米吉
ミヤケ ヨネキチ

(一八六〇／文博・東京文理大学長・帝室博物館長・考古学会会長)

内藤湖南
ナイトウ コナン

(一八六六／文博・萬朝報主筆・京大教授・歴史学)

高橋健自
タカハシ ケンジ

(一八七一／文博・考古学者・三宅の弟子)

笠井新也
カサイ シンヤ

(一八八四／四国徳島の考古学者・史家・中学校教頭だが鳥居龍藏に師事)

和辻哲郎
ワツジ テツロウ

(一八八九／文博・京大東大教授・歴史学・哲学・文化勲章受章・はじめは九州説)

肥後和男
ヒゴ カズオ

(一八九九／文博・史家・東京教育大教授)

三品彰英
ミシナ ショウエイ

(一九〇二／文博・史家・大谷大・同志社大教授・大阪市立博物館長)

志田不動磨
シダ フドウマロ

(一九〇二／東洋史学者・國學院大教授)

末松保和
スエマツ ヤスカズ

(一九〇四／文博・朝鮮史・学習院大教授)

室賀信夫
ムロガ ノブオ

(一九〇七／文博・地図史・東海大教授)

樋口清之
ヒグチ キヨユキ

(一九〇九／文博・考古学・國學院短大学長・日本博物館学会会長・初め九州説)

小林行雄
コバヤシ ユキオ

(一九一一／文博・考古学者・京大教授)

和歌森太郎
ワカモリ タロウ

(一九一五／文博・東京文理大教授・歴史家・都留文科大学長)

原田大六
ハラダ ダイロク

(一九一七／旧制中卒・発掘に業績)

直木孝次郎
ナオキ コウジロウ

(一九一九／文博・日本古代史・岡山大学

理作家の松本清張、会社社長で盲目の作詩作曲家でもあった宮崎康平^{コウヘイ}、歴史作家の邦光史郎^{クニミツシロウ}、歌手の三波春夫、作家の井沢元彦・・・などが「九州説」で知られている。

なかでも宮崎康平は、昭和四十二年に出版した『まぼろしの邪馬台国』で《邪馬台国》ブームを起こした。

一方「大和説」では、俳優としてTVでよく見かける^{カリヤシユンスケ}荻谷俊介、好著『卑弥呼の謎年輪の証言』を書いたジャーナリストの倉橋秀夫などがいるが、数では少数派である。

とくに小説となると、黒岩重吾の『鬼道の女王卑弥呼』など、圧倒的に「九州説」が優位である。その方がロマンがあり物語性が豊かで小説にしやすいので、当然といえば当然である。

この一覧でもうひとつ気づくのは、考古学者の多くが「大和説」をとっていることである。

大正十一年の高橋健自の論文は、古墳の考古学的研究から「大和説」をとった最初のものといわれている。

さいきんでは金関恕や白石太一郎が、慎重な表現ながら、かなり明確に「大和説」を述べている。

ただし考古学者のばあい、議論そのものには参入しないのがふつうである。

著者としては笠井新也、肥後和男といった学者の説に合理性を感じるが、それは第八章以降で詳述する。

＊

《^{ヤマタイコク}邪馬台国》の位置が仮定できると、つぎは〈^{ヒミコ}卑弥呼〉の正体を探る段階になるが、「九州説」のほとんどは日本側の記録にはない有力者としているし、「大和説」では『記紀』にある人名をとる説と記録にない女王だとする説とにわかれる。これらについては第二章で概略を述べる。

一・三

『記紀』と『魏志倭人伝』

『魏志倭人伝』の問題で根元的に重要なのは、文献の信憑性についての吟味である。

『記紀』についての吟味は、『邪馬台国』問題とは関係なしに昔からあり、とくに飛鳥時代以前の歴代天皇の紀年（西暦紀元から起算した年数）の実際との差異については多くの研究があつて、文献学的アプローチに考古学の成果を加えて、第十代崇神天皇くらいまではおおまかな意見の一致がみられる。

それより前は欠史八代といわれるくらいで、『記紀』の記述自体が乏しいので、紀年を探る作業はきわめて困難である。

初代の神武天皇については詳細な記述があるが、その

即位が西暦前六六〇年（これを紀元とするのが皇紀）というのは、干支からいつて辛酉（カノトリ）という革命がおこるとされるおめでたい年を即位の年にし、歴史の古さを誇りたいという『記紀』編纂者たちの興国の志によつており、いわば儀式的なものであるから、その正否を論じることにはあまり意味がない。

◎時代区分の確認と日本人の先祖

ここで参考までに、縄文から平安にかけての時代区分の概要を図1・2に示しておく。

日本どくどくの縄文時代がひじょうに古く長いことが印象的である。

しかもさいきんの考古学的発見によつて、その起源は一万七千年前あたりまで、おおはばに延長される可能性がでてきた。

日本列島における人類の居住は、何十万年も前からだとの説もあるが、それは別問題として、いまのわれわれ日本人に直接つながる人たちの最古の姿は、特有の土器の模様から縄文時代と呼ばれる時代やその少し前の時代

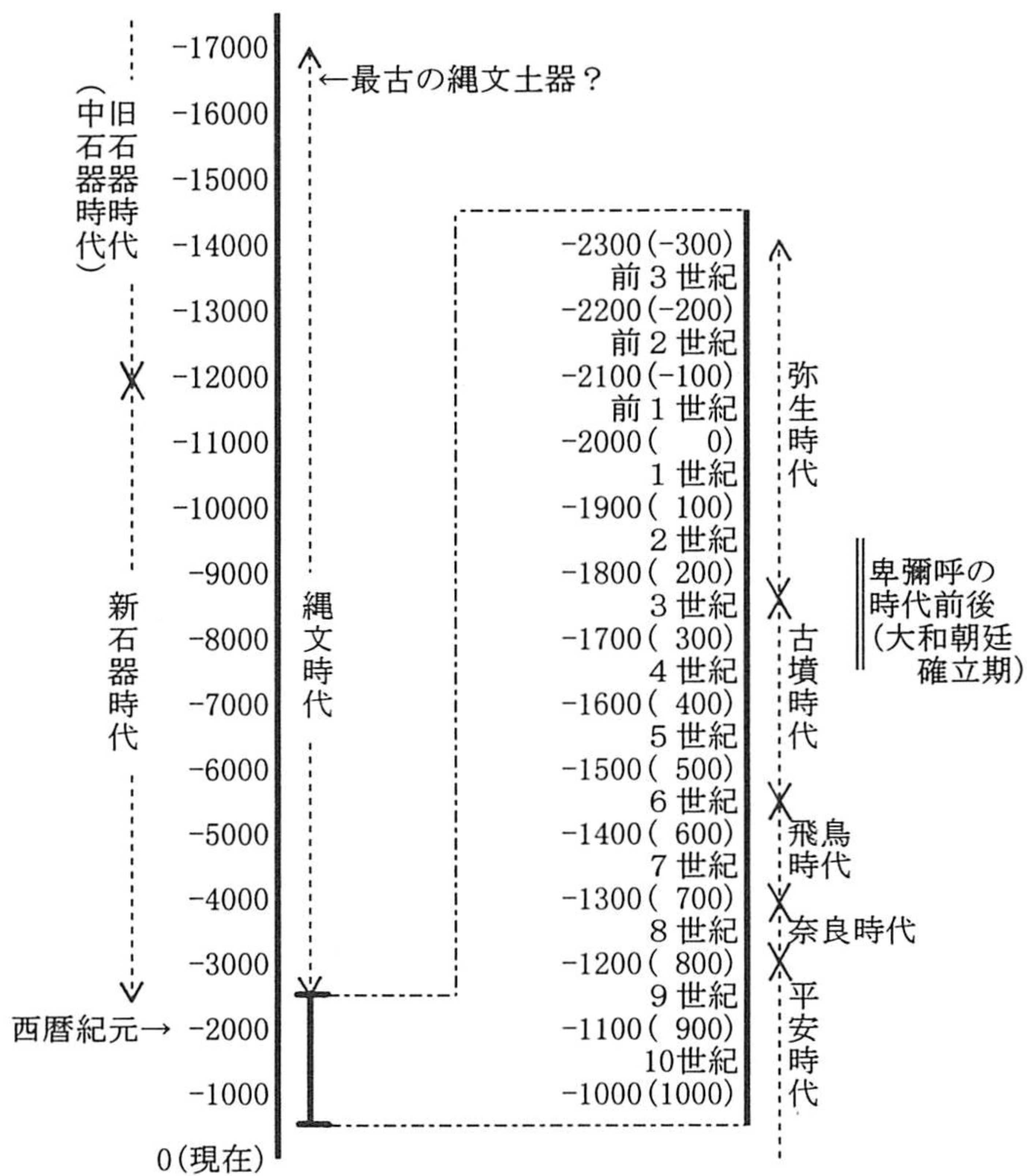


図 1・2 時代区分の概要

——すなわち旧石器時代（氷河期）を含んだほぼ二万年のあいだ——にできあがったのであろう。

では、縄文時代を切り開いた人たちがどこから来たのかであるが、縄文より前は日本列島は独立しておらず、北と南で大陸とつながっていて、日本海は巨大な湖だったので、北から南から西から、さまざまな種族が日本を往来することが可能だった。

最近いちじるしく発展したDNAによる研究では、それら多くの種族のなかでも、シベリアのバイカル湖周辺の人々が約二万年前の氷河期に北から日本列島にわたってきて縄文人の主要部分をなした可能性が高い——とされている。

極寒だった二万年前に暖を求めて南下したのだろう。

そしてたぶん、縄文時代がはじまる直前に氷河期が終わって海面が上昇し、日本列島が大陸から地理的に独立したため、独自の文化を醸成するうえで絶好の環境ができたのだ。

アジア諸地域からの海をこえての移動や混合はじわじわとなされたであろうが、幸いなことに、大陸における民族の興亡の影響をじかには受けずにすんだのだ。

こうして温暖化とともにどくどくの文化や習俗をつくっていった縄文時代の日本人の集団が、弥生時代を迎えて国内で交易や移動を活発化させ、大陸との物的あるいは人的な交流を深めながらさらにその文化を発展させ、ついに古墳時代を迎えるのだが、ちょうどその弥生時代と古墳時代の移行期——たぶん西暦一五〇年～二五〇年ごろ——こそが、『魏志倭人伝』に記された《邪馬台国》の時代なのである。

多くの研究によって紀年修正された『記紀』の天皇紀でいえば、それは第十代崇神天皇スジンの御代およびその少し前にあたっている。

したがって幸いなことに、『魏志倭人伝』と『記紀』との照合も可能だし、また近年の三世紀前後の考古学的研究の進展によって、遺跡からの考察もかなりの確度で可能になってきている。

（図1・2に関連するが、「古代」という用語がよくもちいられる。国史における「古代」は、古い辞書では神武天皇即位から飛鳥時代アスカの直前まで——つまり聖徳太子や中大兄皇子によって法治国家が形をつくりはじめる前ま

で——をいうことが多く、さいきんの辞書では飛鳥・奈良・平安時代をいうことが多い。

一般書では古い用法がほとんどなので、本書では飛鳥時代の前までを「古代」と呼ぶことにする。こういう意味での「古代」の天皇家が狭い意味での大和朝廷である。

◎縄文・弥生交代説の退潮

日本人はどこから来たのか、また日本語はどうやって出来たのか——といった日本民族起源論は昔からあり、延々として議論が続けられているが、さいきんの考古学的研究によれば、どうやら、縄文から弥生にかけて徐々に形成されていったもので、特定のある時期——たとえば弥生初期——に大陸から高い文化をもつ多くの移民がきて、それまで日本列島に住んでいた縄文人たちを駆逐して古墳文化を築いた——といった事態は、あまり考えられないらしい。

かつてこのような説を唱えていた学者も、さいきんでは自説を撤回することが多いようである。

じじつ、日本語はシナ大陸の諸言語とはかなり違って、朝鮮語とも同じではない。東南アジアにも同じ言語は見つからない。

似た側面をもつ言語はあちこちにあるが、直接つながることが証明された言語はない。

もし、圧倒的に高い文化の集団が到来して、それまでの住民を駆逐したとしたら、日本語がその集団の出発地の言語になっていた筈であり、出発地自体についての記憶が——神話や神社の伝承などに——鮮明に伝えられている筈であるが、そういうことはまったく見られないのだ。

ときおり、特定の地域に日本語の起源をもとめる説が発表されることがあるが、学界の批判に耐えて長続きしたことはない。

古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての帰化人・渡来人については、『記紀』などにも記されているのでかなり分かっている、一時期の上層部では一割をこえるようなかなりの人数だったらしいが、当時の人口の大部分を占めていた農業・漁業・林業などに従事する一般の人々のなかにたくさんの帰化人がいたとは思われない。

したがって文化的・技術的にはつよい刺激を受けたと

しても、日本語や日本人の血統自体が激変したことはないであろう。

渡来人たちの影響は、縄文から弥生の時代でも質的には同様だったと考えられる。量的にはたぶん、古墳時代より少なかったであろう。

つまり、文化的にはつねに刺激をうけつつ、言語や遺伝子については、ゆつくりとした影響をうけながら自律的に進展し、縄文時代から奈良時代にいたったと想像できるのである。

奈良時代を過ぎて平安時代にはいると帰化人も減り、九世紀末には遣唐使も廃止されて、閉ざされた世界で日本独特の文化が爛熟したことは、周知のとおりである。

＊

なお渡来人の問題に関連して、かつて東大教授・江上^{エガミ}波夫^{ナミオ}の騎馬民族征服説が流行したことがあった。

東北アジアの騎馬民族が日本を征服して崇神朝など大和朝廷をきずいたという大胆な説だが、さまざまな矛盾があり、いまでは支持する学者はすくない。

考古学的な証拠がほとんど見られないこととともに、

『記紀』に英雄が騎乗して活躍する話が無いことも、反対意見の有力な論拠となっている。

◎戦前への誤解

ここでわざわざばかりの余談をお許しいただきたい。

戦後（大東亜戦争後）の通説のひとつとして、戦前・戦中は『記紀』の紀年、すなわち初代の神武天皇^{ジンム}の即位が西暦換算で紀元前六六〇年などという記述を、そのまま信ずることを強要された——という意見があるが、それには疑問を感じる。

大正（昭和初期）の史学や考古学の論文を読むと、ほとんどの場合、『記紀』の紀年を大幅に修正するのはむしろ当然のこととして、その先の論述が展開されている。

和辻哲郎^{ワツジテツロウ}、肥後和男^{ヒゴカズオ}といった碩学たちも、戦前・戦中に『記紀』の批判的研究を禁じられたことはない、戦後になって語っている。

もちろん反日的プロパガンダになれば話は別で排除されただろうし、公式行事としては皇紀二千六百年の祝典

がにぎやかに行われた。

しかしそれをいうなら、現在でも両陛下は、この皇紀と『記紀』の記述にもとづいて、仁徳天皇陵ニントクへの御拝などをなさっておられる。

それは、古い歴史をもつ国としては当然の行事である。遠い先祖を崇拜し、国の安寧を祈る儀式なのだ。

著者が小学校のときに学んだ『小學國史』にも、神武天皇の即位は書かれていても、それが何千何百年前であったとは記されていなかった。付録をよく読むと何となくわかるというていどであった。

修身の教科書も同様だった。

国の教科書ですら、公式行事の基準としての『記紀』紀年と、学問上の修正とを、両立させていたのである。

◎『魏志倭人伝』への批判精神

このように『記紀』についての吟味は古くからなされていたが、一方の『魏志倭人伝』ギシワジンデンの信憑性シンビョウセイについての吟味は、わが国に古来からある大陸文明への憧憬ドウケイによって

からか、なされることが少なかつたようである。

江戸時代の本居宣長モトオリノリナガらの国学的な立場からの批判をべつにすれば、先の一覧のなかでこのことに明確な意見を述べているのは立命館教授の山尾幸久ヤマオユキヒサで、昭和四十年代に、

「古事記・日本書紀などの国内史料に比べれば、中国の文献に対する本文批判は、一般にたいへん甘い。特に魏志倭人伝は、弁析すべき他の史料がほとんどないため、史料の限界を無視した議論がはなはだ多い（佐伯有清の引用より）」

——と警告している。

山尾自身の史観には疑問をかんじる面もあるのだが、文献批判についてのこの意見は正しいと思う。

このような『魏志倭人伝』ギシワジンデンを無条件に受け入れるシナ礼賛の雰囲気はずっとつづいていたのだが、戦前から疑問を抱く学者も存在していた。

大和地方の遺跡発掘など考古学で多大な業績をあげた樋口清之ヒグチキヨシは、

『記紀』がA級史料とすれば『魏志倭人伝』はB級史料にすぎない」

——と断定しているし、文化勲章の和辻哲郎も、〈天照大神〉の神話を聞いて〈卑彌呼〉の話を創作した疑いがある、と述べている。

さいきんでは、岡田英弘、渡部昇一、西尾幹二といった啓蒙家たちが、

「こまかな議論には値しない文献だ」

——と主張している。

＊

『記紀』の紀年問題や『魏志倭人伝』の信憑性^{シンピョウセイ}については、あとの各章でくわしく記すことにする。